

メンズ化粧の歴史をたどる 制度・美意識・化粧品

ポーラ文化研究所では、2024年11月に開催された一般社団法人日本化粧品専門店協会（CoRe）主催の「2024 CoRe シンポジウム」¹の導入として、男性化粧の歴史を概観する講演を行った。講演はおもに古代から近代までの男性の化粧文化史について、本稿はその講演内容を文章としてまとめたものである。図版については、掲載図版はすべてポーラ文化研究所の所蔵である。また、ポーラ文化研究所所蔵以外の図版についても可能な限り、本稿編集時（2025年1月末）に参照できた、ウェブサイトのURLを貼付した。

はじめに

近年、メンズ美容への関心はますます高まっており、メディアでも多く取り上げられるようになってきている²。昆虫や蝶類など動物の世界では、オスの方が華やかな外見を持つ例が多くある³。では、ヒトの男性が粧うということは、どのようなことなのだろうか。

ここで、遺物から男性の化粧の痕跡を探してみたいと思う。東京国立博物館で所蔵されている《埴輪掛甲の武人》（群馬県太田市飯塚町出土 古墳時代・6世紀）⁴の顔面には、ひげが表現されていないことに気づく。男性を象った埴輪には、ひげの有無があるが、ひげが無いということは、ひげを剃るという化粧行動の表れと考えられるのではないだろうか。シェービングの起源は紀元前2~3千年のエジプトと言われている⁵。ひげは、「男らしさ」という美意識とも結びついて語られることもあった⁶。

本稿ではこのように、歴史や美術の教科書でなじみのある表現や図版を、化粧文化という視点で見直しながら、おもに日本の男性美容の歴史について考えてみたい。

¹ 2024年11月14日、東京国際フォーラムで開催

² 一例として、NHK 首都圏情報ネタドリ！「メンズ美容なぜ人気？クマ・くすみ気になる男性のスキンケア・メイク ポイントは」2024年11月1日放映 <https://www.nhk.or.jp/shutoken/articles/101/014/40/>

「白髪染め、日本初は平安武将（なるほど！ルーツ調査隊）『日本経済新聞』日本経済新聞社、2024年11月11日夕刊、p8など

³ クジャクの雌雄（王子動物園）動物いろいろ【鳥 オスの冬羽】 | 神戸市立王子動物園【公式】

<https://www.kobe-ozizoo.jp/blog/owp/wp-content/uploads/2018/11/%EF%BD%B8%EF%BD%BC%EF%BE%9E%EF%BD%AC%EF%BD%B8%EF%BD%B5%EF%BD%EF%BE%92%EF%BD%BD7960.jpg>）などを参照

⁴ https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-36697?locale=ja 等を参照】

⁵ 『理容刃物大全』滝沢敏久著、理美容教育出版、1969年、p25

⁶ 「ひげ剃りの習慣はいつから？ 知られざる盛衰の歴史」ナショナル ジオグラフィック、2024年1月22日公開 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC11ADQ0R10C24A1000000/>

化粧の意味と目的

ポークラ文化研究所では、現代の化粧行為を以下の5つに分類している。

- 1 塗布・・・顔や身体への塗布
- 2 着装・・・衣服や装身具類の着装
- 3 身体変工・・・癬痕、入墨、抜歯、ピアッシングなど身体への加工
- 4 施術・・・美容を目的とした顔・身体への施術
- 5 ウェルネス・・・健康維持や回復のために身体をケアする行為

1～3は古代から行われてきた化粧行為であり、4、5は近現代以降に美容法の発達や認識の広がりによって拡大、注目を集めている領域である。本稿では、「1 塗布」と「3 身体変工」を中心に話を進めていきたい。

また諸説あるが⁷、ポークラ文化研究所では化粧の目的を以下の4つに分類している。

- 1 本能・・・快感本能や美的本能、性的欲求の表出
- 2 実用・・・保温や保湿、皮膚や毛髪のプロテクトなど
- 3 信仰・・・祈りや呪術といった祭祀儀礼の表現
- 4 表示・・・所属する集団やアイデンティティの表示

これらの目的を1つ、あるいは複数の目的を併せ持ちながら、人は古くから化粧を行ってきたと考えている。

ところで、男性の化粧、よそおいの歴史を考える上で注意したいこととして、残されたビジュアルイメージの特徴について注意が必要なことはわすれてはならない。どのようによそおっていたかを知る手段として、写真それ以前は絵画があるが、東西でとくにルネッサンス以降の表現の違いを考慮する必要がある。西洋では色や質感、陰影などにこだわって、立体的、写実的に描かれてきたが、日本では線や色の面で、平面的にとときには対象の特徴をデフォルメするような表現をとってきた。

また時代区分についても諸説あるが、本稿では『デジタル大辞泉』などを参考に、本稿では以下を大まかな区切りとしている。

- 縄文 ～紀元前3世紀末
- 弥生 紀元前3世紀～3世紀末
- 古墳 3世紀末～6世紀末
- 飛鳥 7世紀
- 奈良 8世紀
- 平安 9世紀～12世紀
- 鎌倉 13～14世紀半ば
- 室町・安土桃山 14世紀後半～16世紀
- 江戸時代 17世紀～19世紀半ば
- 明治・大正・昭和戦前 19世紀後半～20世紀半ば

⁷ 日本顔学会 フォーラム顔学 2024 口頭発表「世界にはどのような美の価値観があるのか：美容価値観指標を用いた日本、アメリカ、中国、デンマーク及びイギリスの比較」小林宏美[ほか]など

縄文（～紀元前3世紀末）

日本人はいつから化粧をしてきたのだろうか。現在確認できている、一番古い化粧道具、男性用か女性用かは不明だが「よそおう（粧う・装う）」という行為をしていた⁸痕跡のひとつに、縄文時代早期（約7000年前）の佐賀県・東名遺跡から出土した木製の櫛がある⁸。

また、縄文時代のヒト「姿」について女性像では、例えば青森県の亀ヶ岡出土の土偶⁹などが残っているが、男性についてはきちんと確認できていない。

弥生（紀元前3世紀～3世紀末）

弥生時代に入ると、化粧に関する記述が残る。中国の正史『三国志』の「魏志」にある「東夷伝 - 倭」の条、いわゆる『魏志倭人伝』である。これが、現在ポーラ文化研究所で確認できている、日本の男性の化粧に関する最古の文献である。魏の人から見た「倭人」の特徴として、男性は大人も子どもも皆「いれずみを」していたことが記されている¹⁰。また、別の箇所では「黒齒国」、つまりお歯黒をしている人の国があったとしている。お歯黒は平安～明治初めまで行われていた化粧の一つであるが、この『魏志倭人伝』の記述からは、どのような化粧料が使われていたかは不明である。

現在確認できている、「いれずみ=化粧」をしている弥生人の顔に愛知県安城市の亀塚遺跡から出土した《人面文壺形土器》がある¹¹。男女の別には諸説あるようだ。

古墳時代（3世紀末～6世紀末）

ヒトを表現した絵画や立体作品を注意深く観察すると、造形された人物像がどのような人でどのような状況にあるのかを知ることができることがある。ここで古墳時代の男性像として、群馬県太田市出土の男性埴輪¹²を取り上げてみたい。

菅笠のような円錐形の被り物、首を1周する丸い玉の首飾りだろう。太刀を佩いているが、鋤も持っている。長い髪を振り分けて耳のあたりで束ねているのは、おそらく美豆良（みずら）だろう。美豆良は古墳時代から結われるようになったとされ、平安時代以降は少年の髪型となった。茨城県土浦市の武者塚1号墳からは、美豆良に結った頭髪が出土している¹³。

⁸ 「国内最古の木製櫛出土／佐賀県東名遺跡」 SHIKOKU NEWS, 四国新聞社、2006年10月18日公開

https://www.shikoku-np.co.jp/national/culture_entertainment/20061018000416

⁹ 国立文化財機構所蔵品検索システム《遮光器土偶》青森県つがる市木造亀ヶ岡出土、縄文時代晩期・前1000～前400年 https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-38392?locale=ja

¹⁰ 文面については、弥生ミュージアムのトピックス「魏志倭人伝」などを参照のこと

<https://www.yoshinogari.jp/ym/topics/>

¹¹ 安城市亀塚遺跡

<https://www.city.anjo.aichi.jp/shisei/shisetsu/kyoikushisetsu/maibun-sites-kametuka.html>

¹² 《埴輪 男子像》6世紀末（群馬県太田市脇屋出土、京都国立博物館蔵）

<https://www.kyohaku.go.jp/jp/learn/home/dictio/kouko/211/> なお、冒頭で紹介した「はにわ展」には出品されていない

¹³ 茨城県武者塚古墳展示施設

<https://www.city.tsuchiura.lg.jp/kamitakatsukaizuka/shisetsu-gaiyo/page000529.html>



美豆良

栃木県真岡市鶏塚古墳出土の《埴輪 挂甲の武人》¹⁴、《埴輪 顎髯の男子》¹⁵のように、埴輪にはフェイスペイントやヒゲなど、さまざまな顔貌が表現されている例も多い。赤い彩色はおそらくベンガラのような赤色顔料を使用していたと考えられ、模様の違いは、部族を識別するユニフォームやまじないなど諸説ある。しかし、美しさや魅力を意識したものであったのかどうかは、確認できていない。

飛鳥時代（7世紀）

推古天皇 11 年（603）、聖徳太子により朝廷における席次を示す位階制度「冠位十二階」が定められた。隋にならって朝廷に使える官人は全て冠を被り、色の違いで位を区別した。このため、男性は冠の下に収まるように、髻（もとどり）を結うようになる。



冠下一髻（古代）

¹⁴ 《埴輪 挂甲の武人》6世紀（栃木県真岡市鶏塚古墳出土、東京国立博物館蔵）国立文化財機構所蔵品統合検索システム https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-22918?locale=ja

¹⁵ 《埴輪 顎髯の男子》6世紀（伝茨城県出土、東京国立博物館蔵）国立文化財機構所蔵品統合検索システム https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-39550?locale=ja

冠を被った聖徳太子の肖像は、昭和 33 年（1958）から昭和 61 年まで発行されていた日本初の 1 万円札にも採用されており、記憶されている方もあるだろう¹⁶。

化粧品については、『古事記』持統天皇 6 年（692）の記述に「沙門観成に（略）其の造れる鉛粉を美めたまへり」とあり、持統天皇が、元興寺の僧侶観成が作った鉛白粉を作った鉛白粉を喜んだという内容だが、使い方や男女どちらが使用したのか等、詳細は不明である。

奈良時代（8 世紀）

奈良時代の男性肖像画は、インターネット検索の力を持って探し出すことが非常に困難である。正倉院に残る《鳥毛立女屏風》や仏画などの女性像から推察すると、よそおいは飛鳥時代からの継続で、中国大陆からの影響が大きかったと考えられる。労働者階級を描いた人物戯画は残っており、有名なものに、写経生が残した業務メモの余白に描かれた「大大論」がある¹⁷。ぎょろり目をむいた男性のヒゲは顔の輪郭に沿って短く整えられ、口ひげは上向きになでつけられているようにも見える。デフォルメされており、服装などからも確かな身分はわからないが、それほど上品な人物とも思えない。しかし、髪はひつつめたアップスタイルに結って、冠の中に納められていることから、それほど高貴な身分でなくても、普段から冠を着用していたことがうかがわれる。

平安時代（9 世紀～12 世紀）

奈良時代に冠の着装にともなって登場した髪型「冠下一髻（かんむりしたのひともと）は、平安時代以降、天皇や公家だけでなく、将軍に代表される極めて身分の高い武家から下級官吏、医師や学者まで幅広く結われるようになった。



冠下一髻（平安時代-室町時代）

¹⁶ 日本銀行 銀行券／国庫・国債 一万円券 https://www.boj.or.jp/note_tfjgs/note/valid/past_issue/pbn_10000.htm

¹⁷ 正倉院「続修別集〈中倉 18〉第 48 卷第 3 紙 正倉院聞き耳頭巾 #1」
<https://shosoin-ten.jp/articles/detail/000279.htm>

10世紀中頃成立とされる『九条殿遺誡（くじょうどのいかい）』という記録がある¹⁸。藤原道長の祖父にあたる藤原師輔（908-960）が公卿としての心得を記した家訓とされ、日々行うべき作法の中に「朝起きたら鏡を見ること」が登場する。しかし、目的はその日の吉凶を占うため、身だしなみを整えるための行為ではなかったようである。

日本女性の化粧文化史は、奈良時代までの古代化粧、平安から江戸時代、一部近代まで続く伝統化粧、近代化粧、現代化粧の4つの時代に大別できる。白粉、紅、黒髪・お歯黒・眉化粧。白・赤・黒の伝統化粧が確立するのが平安時代である。平安時代、上流階級の男性も女性と同様に白粉や眉化粧、お歯黒を行っていた。化粧の手順などハウツーの記録は確認できていないが、化粧をした男性の姿を絵巻物などの絵画資料で確認することができる。例えば平安時代末期成立の《源氏物語絵巻》の「柏木」には、白粉を塗った光源氏が描かれている¹⁹。このほか、《扇面古写経》など類例も多い²⁰。

平安時代末期の絵巻《伴大納言絵巻》（出光美術館所蔵）は、貞観8年（886）に起きた応天門の火災を題材に描かれた3巻の絵巻だが、都の市井の人びとから公家、武家までが生き生きとした筆致で描かれ国宝にも指定されている²¹。なお少し話が横道にそれるが、この絵巻の顔料については、科学調査が行われており、馬上の顔に白粉と同じ鉛白が使われていることが報告されており²²、上流階級と庶民の描き分けが指摘されている。

上流階級といっても、どのくらいの身分の人までが白粉化粧を行っていたのだろうか。清少納言著『枕草子』第二段「ころは、正月」には、「舎人の顔の雪がまだらに消え残ったような白粉が見苦しい」とある。舎人は、天皇、皇族などに近侍し、雑事にたずさわった者で、貴族の子弟や下級官人、庶民から選ばれる。貴人の牛車の牛飼いを指すこともあり、身分にかなり幅があるが、都では広く男性の白粉化粧が行われていたと考えても良いだろう。

お歯黒について天神様・菅原道真を、お歯黒をした姿で表現した肖像画が複数存在する。いずれも後世に描かれたものだが、これは平安時代の上流階級はお歯黒をしていたという後の歴史的解釈の証拠ととらえて良いだろう。

仏教とともに伝来した香が、教養と結びついて貴族の文化へと成熟していったのが平安時代である。5本の縦線と横線を組み合わせた図柄が有名な「源氏香」の成立は室町時代だが、空薫物（そらだきもの）や薫物合（たきものあわせ）の様子が、平安時代の物語や日記文学の中に記されている。

鎌倉時代（13世紀～14世紀半ば）

¹⁸ 『九条殿遺誡』 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00010042>

¹⁹ 徳川美術館 修復完了記念館蔵全巻特別公開 国宝 源氏物語絵巻 柏木三 <https://www.tokugawa-art-museum.jp/exhibits/planned/2021/1113-1/post-06/>

²⁰ 《扇面古写経（模本）》小堀鞆音・寺崎広業模、原本は四天王寺蔵平安時代末。東京国立博物館画像検索 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0018962>

²¹ 《伴大納言絵巻（模本）》冷泉為恭模、江戸時代 東京国立博物館蔵（原本は出光美術館蔵）国立文化財機構所蔵品統合システム https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-11871?locale=ja

²² 早川泰弘[ほか]「〔報文〕 国宝伴大納言絵巻の蛍光X線分析」『保存科学』No.49、東京文化財研究所、2010年 p13-23 <https://www.tobunken.go.jp/ccr/pdf/49/4902.pdf>

鎌倉時代の肖像画として教科書に必ず登場するのが《伝源義朝像》だろう²³。この時代、為政者が公家から武家へと大きく変化する。平家平安末期から鎌倉初期に成立したとされる軍記物語『平家物語』には平家武士の化粧についてのエピソードが残されている。「忠度最後」では、源氏方の岡部忠澄が誰何した武将（平忠度）がお歯黒していて、平家方であることが発覚。「敦盛最後」源氏方の熊谷直実が呼び止めた武将（平敦盛）が、薄化粧、お歯黒の若い武将であったとされる。鎌倉時代から戦国時代のいわゆる合戦の時代、戦の後には武功の検証のため首実検が行われた。「首」を準備するのは女性の仕事だったとされるが、少しでも高い武功とされるよう、化粧を施すことがあったようだ。

また、鎌倉時代にも武家の化粧が行われていたことを想像させる絵画資料も存在する。鎌倉時代半ばの大きな出来事に元寇がある。歴史の教科書には必ずといっていいほど登場する《蒙古襲来絵詞》にも、武士の化粧の様子を見ることができる。いわゆる文永・弘安の役で活躍した肥後の御家人・竹崎季長の戦功を記録した絵巻だが、徒の隨身に比べ馬上の季長の顔はひとときわ白く描かれており、白粉化粧を想像させる。

引き続き冠を被るのに都合の良い、高く結い上げた髪型が主流であったが、整髪料にはサネカズラの粘り気のある樹液を水で溶いて使っていたようだ。サネカズラは本州から沖縄まで広く分布し、『万葉集』にも詠まれている、日本に古くからある植物である。別名ビナンカズラ（美男葛）とも呼ばれ、江戸時代にびんつけ油が登場する前に用いられていたと考えられる。

室町・安土・桃山（14世紀後半～16世紀）

この時代を代表する肖像画には、長興寺蔵の《織田信長像》を挙げたい²⁴。全時代からの大きな変化として、近世を通じて日本男性の髪型の大きな特徴である「月代（さかやき）」が現れる。戦乱の世に実用面を重視した結果、月代を作るようになったというのが有力な説だ。武士は戦場に向かう際、兜を被るが、その時、蒸れて頭がのぼせないよう前頭部の髪を抜いたり剃ったりしたものが月代の始めとされている。その後、常に月代をつくることになり、幅も広がっていった。

²³ 《伝源頼朝像》13世紀、神護寺（京都国立博物館蔵）

<https://www.kyohaku.go.jp/jp/collection/meihin/shouzouga/item01/>

²⁴ 豊田市美術館「よみがえる織田信長像展」ウェブサイトなどを参照

<https://www.museum.toyota.aichi.jp/exhibition/%E4%BF%AE%E5%BE%A9%E8%A8%98%E5%BF%B5%E7%89%B9%E5%88%A5%E5%85%AC%E9%96%8B%E3%80%8C%E3%82%88%E3%81%BF%E3%81%8C%E3%81%88%E3%82%8B%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%95%B7%E5%83%8F%E3%80%8D/>



大月代（安土・桃山時代）

また、一般庶民の男性はこの時代、髪の毛を頭上で束ねていたが、烏帽子などのかぶりものはあまりかぶらず、鬣も短くしていた。



たぶさ（室町時代）

なお、戦国武将の一人、今川義元が京都寄りの武士で、白粉やお歯黒の化粧をしていたという説をよく聞くが、記録は確認できていない。

江戸時代（17世紀～19世紀後期）

男性のよそおいは髪型が中心、ひげは剃る文化が江戸時代を通じて続く。

よそおいの過渡期を表現した絵画として《風俗図（彦根屏風）》を挙げておこう²⁵。髪型や服装など旧時代（安土・桃山）と、新時代（江戸時代）両方の雰囲気をよく伝えてくれる。

さて、江戸時代中期の武士の修養書『葉隠』をご存じだろうか。「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という言葉が有名で、正しくは「葉隠聞書（はがくれききがき）」といい、鍋島藩士山本常朝（やまもと

²⁵ 彦根城博物館ウェブサイト「収藏品」などを参照 <https://hikone-castle-museum.jp/collection/331.html>

つねとも)の談話を田代陣基(たしろつらもと)が筆録。享保元年(1716)成立。鍋島藩が、平和な時代に藩士たちの引き締めのためにまとめたといわれている。髪に香を焚きしめるなど、平生から身だしなみに気を配ることは、一見しゃれ者のようにもみえるが、それは普段から必死の決意でいることの表れである、と記されている。

現代でも力士とすれ違ふとふわりとよい香りがする。髷を結うためのびんつけ油の香りである。このびんつけ油が登場したのが、1670年頃と言われている。主成分はろうそくなどにも使われる木蝋に賦香したもので、男女ともに使用した。

ところで「ちょんまげ」と江戸時代時代以前の髪型を総称することがある。実はちょんまげは男性結髪の一つにすぎない、結った髷の形が「い(ちょん)」に似ているところからこう呼ばれた。



丁髷 (ちょんまげ)

江戸時代の男性の髪型は実に多様で、数百にもものぼる髪型が生まれたとも言われている。女性の髪型は身分やライフステージで変わるが、男性も粋筋が好む、武家風など身分や年齢によって結い分けた。



髪結いは16世紀から存在していたが、職業人として広く活躍するようになるのが、江戸時代である。引き出しのついた鬢盤（びんだらい・結髪道具箱）を下げて客のもとへ出向く周り髪結いや髪結床で活躍した。式亭三馬の『浮世床』には男性客で販わう髪結床が描かれている。



《白木屋お駒》豊国画、嘉永頃



《結髪道具箱》江戸時代後期

男性の髪型の結い賃は1回24文。江戸時代は貨幣価値の変動が激しく、現代との比較が難しいが、かけそば1杯16文を現代の立ち食いそばの価格500円で換算すると、750円程度となる。女性の場合、月1回の結い直しと、数回のなでつけを行う月極が1か月200文で、約6千円。女性と比べ頻繁に通うことができた。

先に、武士の美意識として『葉隠』を紹介したが、江戸庶民の状況を知る手がかりとして、安永2年(1773)に刊行された若者向けの傾城買いの指南書『当世風俗通』がある²⁶。

士農工商という江戸時代の身分制と経済力は必ずしも一致しないことを前提として考える必要があるが、階級別ファッションブック、ヘアカタログとして興味深い。2025年のNHK大河ドラマの宣伝が始まっているが、若き蔦屋重三郎(1750-1797)が目にした可能性があると思うと、胸が膨らむ。

江戸時代の商工業の発達に伴い、ようやく市販化粧品が充実してくる。文政7年(1824)に刊行された商人・職人名鑑『江戸買物独案内』は品目別に住所やのれん印を掲載しており、ガイドブックの役割も果たしたと考えられる²⁷。

²⁶ 『当世風俗通』奈良女子大学学術情報センター蔵(国書データベース)

<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100239392/1?ln=ja>

²⁷ 『江戸買物独案内』国立国会図書館デジタルコレクション <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I000007277787>



古代から江戸時代までの男性の髪型の変化

近代以降（19世紀末～）

ここまで、江戸時代までの男性化粧の流れについて述べてきたが、この後の展開について、簡単に触れておきたい。

明治元年、太政官布告で公卿のお歯黒、眉剃りを禁止、翌々年の明治3年にも改めて華族のお歯黒と眉剃りを禁止する。上流階級の伝統化粧を法令で禁止したが、女性庶民は白粉に紅、お歯黒、眉剃りといった江戸時代以来の化粧法を続けた²⁸。明治4年、同じく太政官布告で散髪が認められ、明治天皇が率先し断髪。明治5年以降、各県での断髪令により一般男性の断髪が増加していくこととなった。ここで、ポーラ文化研究所で所蔵する錦絵《東風俗福つくし 大礼ふく》を見てみたい。幕末、海外からの外交官に御簾越しで謁見した明治天皇は、公家のしきたりに則って、お歯黒眉剃りをしていたといわれているが、明治以降、公式行事には洋服で臨むようになったようだ。大礼服は、重要な儀式の際に天皇が着用した洋服で、欧米人並みの体格が求められるようになった。明治31年（1898）に資生堂が発売した「住の江」の広告には「ひげ油」記載されており、ヒゲ用の香油で男性向けの化粧品だったようだ。

²⁸ 明治元年正月六日付太政官布告「男子鉄漿上古無之儀ニ候、以後可任所存被仰下候事」但若年作眉の事（公卿の染歯・掃眉停止）太政官布告 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787951/195>



《東風俗福づくし 大礼ふく》楊洲周延筆 明治 22 年（1889）

はっきりと「男性用」をうたった化粧品の発売は昭和 30 年頃から盛んになるが、戦前から女性用の化粧水を「ひげそり後に」などと訴求することもあった。ウテナ化粧品は「ウテナ男性クリーム」を昭和 32 年（1957）に単品で発売、その後シリーズ化が進む。有名なところでは、資生堂が昭和 42 年（1967）に発売した MG5 があ In る。1980 年代後半には、細野晴臣、高橋幸宏、坂本龍一の YELLOW MAGIC ORCHESTRA がサイケデリックな化粧をしてパフォーマンスをしたり、昭和 61 年（1986）に資生堂が発売した GEAR の宣伝に陣内孝則が起用されたりしたが、一部のあるいは一過性の動きにとどまった。

ポーラ文化研究所では 1970 年代より、人々の化粧・美意識、そして生き方にスポットをあて調査研究を続けている²⁹。現在はまだ意識に大きな男女差はない状況であるが、今後調査を重ね、推移を見ていきたいと考えている。

ここまで、男性化粧の概略をたどってきたが、近年ボーダレス、ジェンダレスなど様々な垣根が消失する中で、男性化粧が変化しつつあると感じていることをお話しし、この後の座談会にバトンタッチしたい。

²⁹ 化粧と生活の調査レポート <https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/report/>